

と思います。

2. そもそも資源経済学とは何だ？

日本の大学に「資源経済学」という名前の学科や講座は無いようですが、だからと言って資源経済学が日本には存在しない学問だという訳ではありません。諸外国で資源経済学と呼ばれている学問は、日本では地質学や資源工学、経済学、金融学等の中にバラバラになって紛れ込んでいます。資源経済学とは、これらの分野から「資源」と「経済」に係る部分をくくり出したものと言えます。

実際には、このくくり出し方に明確なルールがある訳ではなく、そのカバーする範囲や各分野への比重の置き方にはケースによってかなり違いがあるようです。これからその各論を紹介しようとしている以上、まず始めにその全体のイメージについて示しておこうと思います。そこで、本書で言う「資源経済学」は以下の3つの部分から構成されると考えて下さい。

- 1：一般的な経済学（経済学の基礎理論、専門用語、仮定の置き方など）
- 2：鉱業活動のノウハウの経済学的側面（企業、投資家の立場での資源経済）
- 3：資源に的を絞った特殊な経済学（政府、研究者の立場での資源経済）

経済学はその議論の対象が何であるかに関わらず常に共通の手法で物事を論じようとするので、2や3の議論のために1がどうしても必要となります。

しかし、こうした基礎知識の導入部というのは、往々にして単調で退屈なものです。そこで本書では、一般経済学の知識を事前に一通り説明することにはせず、個別の内容ごとにその理解に必要な概念や用語をその場で簡単に解説しながら話を進めたいと思います。詳しい説明は、経済学の参考書を読んでみて下さい。

分類の2は鉱山開発の現場での収支計算術を源とする現場サイドの経済学であるのに対し、3は資源問題を政策論として論じる際の理論的裏付けとして持ち出される特殊な経済理論です。これから各論として紹介する内容は、この両者のいずれか一方に属するものです¹⁾。経済学という手法で資源という対象を論じるには、その視点の置き場所の違いによって2通りのアプローチの仕方があるのだとお考え下さい。

3. 資源プロジェクトの経済評価

3-1. DCF分析の基礎

ではまず各論の手始めとして、いわゆるプロジェクト評価を取り上げてみたいと思います。これは、資源開発を事業又は投資案件として評価する技術ですから、前述の分類で言うと2に属するものです。

プロジェクトの経済評価とは、あるプロジェクト（鉱山開発でも、株の購入でも、何でもかまいません）に資金をつぎ込んで後にそこから利益を回収する時に、その儲かり具合を定量的に測ることです。もし資金投入と利益の回収が同時に起こるのであれば、単に投資額と回収額の差を計算すれば済む話ですが、通常は資金を投入した後しばらく経ってから利益が出るので、その間の時間の経過をどう取り扱うかがポイントとなります。

プロジェクトの収益性の最も単純な尺度として昔から用いられてきたのが、資金回収期間の長さ（**Payback Period**）です。この場合、回収期間が短いほど望ましいという事になります。しかし、この評価法は資金を回収した後に

1) 京都大学の西山先生が書かれた「資源経済学のすすめ（中公文庫）」という本があります。これは、地質学・資源工学の知識を経済活動の視点から解釈したもので、本稿の分類で言えば3に含まれるでしょう。